

## The best image 「画論」 へのお誘い

JCHO 北海道病院 山口隆義

東芝 CT ユーザーであれば、「画論」に応募する事ができます。当たり前ですよ。ですが、「大学病院だから、色々な症例があるので、入賞できるんじゃないの?」「ハイエンドの CT 装置だから、あんな画像が出るんだよね～」というお話を聞く事があります。確かに、大昔はそのような傾向はあったかもしれませんが、20 年位前では、ワークステーションで作成された「美しい画像」は、とても新鮮だったと思います。また、マルチスライス CT の登場によって、これまでに表現の難しかった珍しい症例などが 3 次元画像としてリアルに再現され、益々「画論」の冊子がカラフルになってきました。ですが、過去の受賞画像をよく振り返ってみると、320 列から始まったと思っていた撮影が、実は数年も前に 16 列で行われていたり、すっかりスタンダードとなっている画像構築方法が画論発祥だったりするのです。また、その中には、診療放射線技師のアイデアによって行われた検査も多く、単に「珍しい症例」だけでは受賞していない事に気付きます。

特に「テクニカル賞」が始まってからは、診療放射線技師の目線での評価が加わり、より技術面が問われるようになりました。東芝の CT 装置には、チルトヘリカル撮影やバリエブルピッチなど、他社にはない魅力的な機能が色々あります。これらを上手く組み合わせた応募作品は、審査員の目を引く事が多いように思います。勿論、被曝線量は常にチェックされますので、AIDR3D 使用の有無だけではなく、ピッチの使い方や撮影範囲なども細かく見えています。ここ数年で、被曝低減への取り組みが当たり前となってきた事から、最近は、撮影や造影方法を工夫した応募が多くなってきました。画像としてのインパクトは少なくとも、それを上回る創意工夫があれば、上位入賞の可能性は高くなります。

私が、今年審査していて一番印象に残っているのが、Aquilion ONE のガントリに直接置く事ができる発泡スチロール製の撮影補助具です。円形のガントリ内に半円の巨大な発泡スチロールが配置された画像を見た時は、驚きと同時に“やられた”という印象でした。こんなに大胆な発想は、意外と思いつかないものです。それを、実際に作ってしまったというのが素晴らしい。掌側指動脈

の動静脈奇形および瘤の 4DCT で、症例的にも **Dynamic volume scan** の有用性が高いという事で、テクニカル賞と最優秀賞のダブル受賞となりました。受賞者にお話を聞くと、当初は水ファントムを、寝台上ではなく空中に置ける方法として考えられたようですが、現在は四肢撮影用としても用いており、撮影部位以外への被曝低減対策も行われていたのも評価が高かった所です。是非、皆様も参考にしてみてください。

さて、来年は？という所ですが、毎年の流れとして、前回の受賞作品と同じような症例が多く応募される傾向にあります。正直言いまして、これは **NG** です。これからは、新しい領域への **CT** 検査の応用がポイントになると思います。超音波検査や **MRI** 検査の様な情報が **CT** で得られるというのも“あり”ではないかと個人的には思います。是非、新しい視点で **CT** 検査を見直してみるもの良いのではないのでしょうか？（被曝には常に配慮願います。）

東芝 **CT** ユーザーであれば、「画論」に応募する事ができます。来年は、是非応募してみませんか？